蜂との共生で紡がれた現在
蜂と共創する未来

特集
ニホンミツバチの蜂蜜

森松和彦

文：梶原圭三
写真：川上和禎

“人類とミツバチ”

もし、ミツバチが存在しなければ今の人類の繁栄は無かったかもしれない。

数年前、この言葉を聞いた時、私は全くと言って良いほどピンとこなかった。因果関係がまるで見えなかったからだ。皆さんはピンときただろうか。理由はこうである。我々が食している穀物や野菜、果物などが実る為には必ずと言って良いほど受粉が必要だ。受粉は、花粉が風に乗って運ばれて受粉する場合もあるが、その多くはミツバチなどが媒介となって受粉に至る。2011年、国連環境計画のアヒム・シュタイナー事務局長はこう報告した。「世界の食料の9割を占める100種類の作物種のうち7割はハチが受粉を媒介している」。ミツバチは、自らの種を維持する為に花や樹木から蜜を集め、それを蜂蜜に加工し、栄養補給・貯蔵している。その行動の過程で、受粉を手助けするポリネーター（送粉者）という役割も担っている。現在においても、仮に世界中からミツバチがいなくなれば人類は4年以上生きることはできないと言われている。この壮大な因果関係を想像すらできなかった自分を恥じたと同時に、ミツバチについての好奇心がムクムクと湧いてきた。

ミツバチが地球上に現れたのは約2千万年前～1千万年前と言われており、人類の歴史が数百万年である事を考えるとミツバチの誕生の古さが際立つ。蜂蜜と人類の関係は古くて長い。英国には『蜂蜜の歴史は人類の歴史』ということわざがあるほどで、紀元前6000年頃に描かれたとされるスペイン東部のアラニア洞窟の壁画にはミツバチの巣に手を入れて蜂蜜を採取している人の姿が描かれている。その後、紀元前5000年頃にはギリシャ神話にも、養蜂の神アリスタイオスが登場している。ちなみに最高神ゼウスは山羊の乳と蜂蜜で育てられたと伝えられている。エジプトやメソポタミア、アメリカ大陸においても古くから人類が蜂蜜を採取していた形跡が見つかっている。つまり蜂蜜は、おそらく数万年前から世界中で採取されていた。栄養価も高く長期保存でき、尚且つ濃厚で豊潤な甘味は古くから人類を魅了し続けたに違いない。だからこそ古代人は刺される危険を冒してまでも蜂蜜を素手で採取しようとした。人類とミツバチ、人類と蜂蜜、そしてミツバチと蜂蜜。このトライアングルから何が見えてくるのか。一人の養蜂家を通してその実態に迫って行きたい。

“和バチと洋バチ”

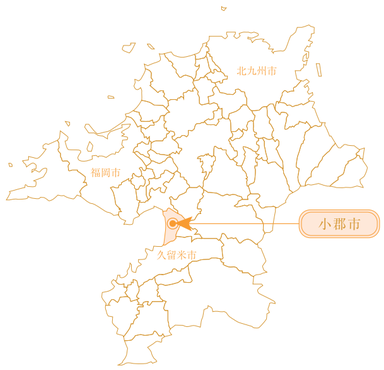
森松和彦さんがニホンミツバチの養蜂を始めたのは20歳の頃。本業の建設業としての仕事の傍ら、趣味で始めた。現在は、小郡市や八女市星野村などに、合わせて30～50群ほどの巣箱で養蜂を営んでいる。「和バチは一日中眺めとっても飽きんとですよ」と、森松さんは優しい眼差しで巣箱を見つめる。和バチとはニホンミツバチの通称で、これに対しセイヨウミツバチの事を洋バチと言う。

日本国内には現在、2種類のミツバチが生息している。ニホンミツバチとセイヨウミツバチである。読んで字の如く、日本蜜蜂と西洋蜜蜂という訳だ。ニホンミツバチとセイヨウミツバチの違いを一言で言い表すならば野生と家畜の違いである。ニホンミツバチは大昔から日本に生息している日本固有のミツバチで、何千年もの間、日本の環境に適応し生き抜いてきた。一方でセイヨウミツバチは明治以降、養蜂の為にアメリカから輸入されたミツバチである。日本の自然環境に適応できない為、人間の保護が無ければ生き抜く事はできない。例えば、ミツバチの天敵であるオオスズメバチの襲来に対し、ニホンミツバチは無闇に迎え撃たず、集団で巣を守ろうとする。一方でセイヨウミツバチは、気性が荒い事もあり単身迎え撃つが、その結果オオスズメバチの餌食となり巣ごと全滅させられる。セイヨウミツバチが野生化できない大きな要因の一つである。

野生と家畜という表現から野生は気性が荒く、家畜は大人しいというイメージだがミツバチの場合は逆である。野生のニホンミツバチの方が大人しく、セイヨウミツバチは気性が荒い。ニホンミツバチは、森松さんと一緒に巣箱を覗き見る私に対しても一向に刺してくる気配がない。「ストレスが少ない状況であれば、ほとんど刺さんですよ」。森松さんは一眼でストレスがあるかないかを見分ける。「ニホンミツバチは匂いも覚えていますよ。だから知っている人には刺さんですね」。25年もニホンミツバチと向き合ってきたからこそわかる身体感覚なんだと私は深く肯いた。

“養蜂の歴史”

日本でミツバチが最初に文献に登場するのが日本書紀である。643年に百済人の余豊が奈良の三輪山で養蜂を試みたが失敗に終わったという記述である。これが日本における養蜂の起源というのが通説になっている。奈良時代、平安時代には朝廷への献上品として蜂蜜が度々文献に登場する。唐招提寺を開いた事で知られる唐の僧、鑑真が渡来した際にも積荷に蜂蜜があったと記されている。当時は食品としてよりも薬として重宝されていたようだ。養蜂が本格的に行われるようになるのは江戸時代からである。社会が安定し貨幣経済が進展するに従い換金性の高い生産品に関心が高まっていき、ミツバチの生態や養蜂技術に関する書物も数多く出版されていた。特に1872年（明治5年）に編纂された『教書　蜂蜜一覧』は養蜂の伝統技術や製品を彩色印刷したもので、セイヨウミツバチが導入される前のニホンミツバチの養蜂技術を示す資料として極めて貴重である。現在に至っても、ここに記されている技術の多くが踏襲されている。これによって、日本国中にニホンミツバチの養蜂技術が伝播したものの、一方で採蜜量は極めて貧弱であった。野生のニホンミツバチを人間の都合で飼育しようとする訳である。ままならないのも肯ける。

自然をコントロールしようとする人間の傲慢さはいつの時代も変わらない。1877年（明治10年）、新政府は養蜂を産業化すべく、アメリカからセイヨウミツバチを購入し内藤新宿の勧農局試験場にて研究を始めた。これが、我が国にセイヨウミツバチが輸入された最初だと言われている。その後、セイヨウミツバチの生態が明らかになるにつれて、セイヨウミツバチの養蜂が各地で広まっていった。セイヨウミツバチの養蜂が広がっていった要因はニホンミツバチとセイヨウミツバチの違いにある。前章で野生と家畜という違いを述べたが、ニホンミツバチは集蜜環境（蜜源）に変化が起こると巣から逃げ出してしまう習性がある。例えば、人間が自然に手を加えたりした場合などだ。ニホンミツバチは環境変化に敏感なのだ。セイヨウミツバチにはそれがほとんど無い。他にもセイヨウミツバチはニホンミツバチに比べ、集蜜力が高く（ニホンミツバチの4～5倍）、一群当りのハチの数も多い（約2倍）。つまり、セイヨウミツバチの方が逃げ出すリスクも少なく、尚且つ一群当りの蜂蜜の採蜜量が8～10倍になるのだ。（詳しくはイラストページ参照）。経済性を考えるとセイヨウミツバチの養蜂が広まるのはごく自然な事であった。

戦中戦後、砂糖が配給制だった事もあり、甘味不足は甚だしく蜂蜜への関心は高まった。価格は高騰するものの飛ぶように売れたと言う。しかし、戦後の混乱も落ち着くと、高度経済成長に伴う国土開発で蜜源である自然は荒廃の一途を辿り、養蜂を取り巻く環境は厳しさを増していった。1980年代以降はさらに土地開発が進み、蜜源を農地に求めるようなる。農地では農薬使用の為にミツバチへの影響は小さくなかった。1960年代に比べ主要な蜜源は激減し、尚且つ安価な外国産の蜂蜜の輸入が急増し日本の養蜂は極めて厳しい状況にあった。平成30年の国産蜂蜜の自給率はわずか6%である。